

大会長挨拶：

日本機能水学会第21回学術大会の開催にあたって

靄 知光

(社会医療法人天神会新古賀病院 教育研修本部長)



この度、伝統ある日本機能水学会の第21回学術集會を開催させていただきます新古賀病院(福岡県久留米市)の靄でございます。20年という区切りの大会を岩澤篤郎先生が昨年立派に開催された後の新たなスタートとして私が本学会をお世話できることは身に余る光栄であると身の引き締まる思いです。

私が初めて機能水というものに関わりを持ったのは、まだ久留米大学病院の小児外科に勤務しておりました20世紀も終わりに近い1999年頃の事でした。千葉の小児病院の国内留学から帰ってきた先輩が、「千葉では病棟で酸性水というものを生成して、創部の消毒やストーマ(人工肛門)の洗浄の他、形成した肛門部の洗浄などを積極的に行っており、とても効果的だった」と話をしてくれたのがきっかけでした。それ以来、早速病棟に生成機器を買ってもらい、実際の臨床で外傷や手術の創部、新生児の人工肛門洗浄、新生児の入浴や皮膚感染の治療に使用して大きな効果を上げ、患児の親御さんからも感謝されたものです。

しかし臨床の世界で度々その効果をアピールしてもその反応は冷たく、我々の感触とはほど遠く忸怩たる思いが続きました。2004年に雪の聖母会聖マリア病院に移ると上司の理解もあつてか再び臨床応用を試みて、機能水学会の堀田先生や諸先輩方の御協力の下、術前手洗や腹腔内洗浄、救命センターの外傷洗浄等の臨床研究を行うことができました。その結果は過去の本学会で度々発表させて頂きましたのでご記憶の先生方も多いと思います。

この3年以上の間、我が国は新型コロナウイルス感染症というものに戸惑い、振り回され、明確な方向性を見失った感がありますが、皮肉なことに次亜塩素酸水と呼ばれるようになった機能水(以前の酸性水)はこのコロナ禍で逆に注目を浴びるようになりました。このことが吉とでるか否かは今後の本学会を中心とする我々の活動にかかっていると思われます。

そこでやや力みすぎの感はありますが、今回のテーマを

**「コロナの夜は明けた。今こそ機能水の新時代を切り拓く」**

とさせて頂きました。

私は機能水の臨床応用と並行して、(株)大塚製薬工場と協力の元新たな経口補水液(OS-1)を開発しましたが、これも2001年に発売したときは「拙い」、「塩っぱい」、「こんなもの売れない」と散々な評判でした。しかしその後の熱中症の予防や災害時の脱水予防で注目され、地道な研究や啓蒙活動が実を結び、ようやく最近になって世間の理解が得られるようになりました。

これらの経験を元に私が学んだ事は、如何に素晴らしいものや研究・真実でも人々を納得させるには我慢の時間が必要だということです。機能水もコロナ禍が明けて、注目された事を更に発展させるためには今まで以上のアイデアと努力が必要であると考えます。今回の学術集會が機能水の有用性を世間に知らしめる新たなスタートのきっかけになることを祈念して止みません。

今回の学術集會は久々の福岡市での開催です。何と言っても福岡には美味しいものが溢れています。コロナも気にせず、学会の合間には大いに福岡の町を堪能して頂ければ幸いです。どうぞ皆様、多数のご参加宜しくお願い申し上げます。